

○テキスト

・トラック1

「ん、あれ？ 先輩、まだ残ってたんですか？」

「あ、はい。ちょっと忘れ物があって」

「えーっと……あ、あったあった」

「えへへ、コレです」

／主：クロッキー帳？ 練習でもするとか？

「はい、まあ。先生に、『指先の表現が固いからもっと描いて研究してみたらどう？』って言われて……自分でもイマイチなのはわかってるので。だから、最近ちょっとがんばってるんです」

／主：うん、よく描いてるよねソレで

「え？ あ、知ってました？ うわ、ハズ……もしかして、このクロッキー帳見ました？ ……ああ、確かに。美術室でもよく使ってますしね。なんだ、よかった」

／主：じゃあ、もしかして最近ハンドモデルをひとつ見かけないのって……

「ハイ、うちにあります……あ、もちろん先生に許可もらってますからね？ 持ち帰ったのも、左手のハンドモデルだけです。右手はホラ、そこに……って、私のことはいいんです。先輩は？ まだ帰らないんですか？」

／主：いや、傘がなくてね……仕方ないから進めてた

「え、傘が？　置き傘はないんですか？」

//主…ないし、誰かの忘れ物を使うのも忍びない

「あー、まあ、気持ちはわかります。何年も前の傘だろうって思っても、もしかしたらって思うと勝手に使うのは気が引けますよね……」

「あ、なら私の傘に入っていきます？　うちのマンション結構近いんで、寄ってもらえればそのまま傘貸せますよ」

//主…いいの？　ならぜひ

「ん、じゃあそつしましょ。ふふ、後輩女子との相合い傘とか、明日噂になっちゃうかもしれませんねー？」

//主…ええ……？

「あはは、うそうそ。それくらいで噂になってたら、今頃校内カップルだらけですよ」

「で、すぐ帰ります？　まだ途中ですよ、それ」

//主…もうちょっと、切りの良いところまでいい？

「……ん、了解です。なら、描いてるところ見てもいいですか？　……えへへ、やっ
た。私と違って心ひろーい」

「おお、相変わらず細かいなあ……どうなってるんですか、その背景の子犬。そんな細い
線が描ける筆、持っていました？」

「……えー、ソレで描いたんですか？　意味わかんない」

「うーん、やってることは同じなのになあ……やっぱり、乗る色がなんか違うんだよなあ……」

「はい、楽しいですよ。先輩だって、よくみんなの作業してるところ見てるじゃないですか。面白いから見てるんですよ?」

「ふふっ、ほらやっぱり。特に先輩の絵だし、たぶん何時間でも見ていられますよ。先輩は集中できないでしょうけど」

「ですよー」

「あれ、もういいんですか?」

「いえ、さっき言ったとおり何時間でも待てますけど」

「……ふふ、確かに。それじゃ帰りましょうか」

「お待ちせーす、先輩」

「はい、どーぞ。……ん? なんです、それ。お手?」

「傘ですか? ……あー、そっか。持ってくれるんですね。すいません、察しが悪くて……」

「いやあ、その……友達と相合い傘する時は、だいたい私が持つこと多くて。あんまり考えてませんでしたけど、確かに背の高い方が持つべきですよね」

//主…そもそも入れてもらってるんだし、俺が持つべきでしょ

「おー、確かに。先輩、紳士ー」

「あ、コッチです。駅に行く途中なので、このまま真っ直ぐですね」

「なんか、今更ですけど……ちょっと恥ずかしいですね、相合い傘。さっきも言った通り、友達とならするんですけど。先輩……っていうか、男の人とは初めてなので」

「え、先輩も？ 女子の先輩達とも仲良いじゃないですか」

「……なるほど。言われてみれば、先輩達みんな元気ですよ。女子というか、女兒っぽいうtica……あ、私が言っちゃダメですよ？」

「ふふ、ならいいですけど」

「……そっかあ、先輩も初めてなんだ」

「ですねー、こんな降るとは思いませんでした。天気予報、夕方にはやむって言ってましたけど……ホントかなあ？」

「あ、傘は適当なタイミングで返してくればいいですよ。家に帰れば何本もありますし、折りたたみも持ってますし」

「……ふふっ、はい。折りたたみ持ってます、今。でもせっかくの機会なんですから、相合い傘するのもいいじゃないですか？ それにほら、使っちゃうと乾かすの面倒ですし。

……まあ、お母さんがやってくれるので、私は面倒じゃないんですけど」

「うんうん、ですよ。後輩のお母さんに手間を掛けさせるのも申し訳ないですよ。だから、これでいいんです」

「それに、どうせウチは近いのですべ——」

「え？ わっ！」

「……え？ せ、先輩？ いま、すごい水掛かって……って、わわっ。ずぶ濡れじゃないですかっ！」

「もうっ……ありがとうございます。嬉しいですけど、そのままじゃ風邪引いちゃいますよ！ ウチ、寄っていつてくさいっ」

「タオル取ってくるので、このまま待ってもらえますか？」

「んーと……」

「お待ちせしました、とりあえずコレで軽く水気だけでも取らせてください。そしたらすぐ、シャワー浴びちゃってもらえますか？ お湯出るようになってるんで」

「あ、もちろん私が拭きます。背中、向けてもらっていいですか？」

「はあ……ビックリしましたよ。お話しするのに夢中で、水たまりにもトラックにも気づいてませんでした」

「先輩がいきなりコッチ向くから、口説かれるのかと思って焦っちゃいましたし。……跳ねた水から庇われたことの方が、もっと焦りましたけど」

「あゝ……やっぱり泥も混じってるから、髪もワイシャツもちょっと汚れちゃってますね。洗濯すれば綺麗になると思いますけど……下って、Ｔシャツも着てますよね。今日、ジャージは持ってますか？」

「じゃあ、お父さんので申し訳ないんですけど替えの下着を用意しておくので、シャワー浴びてもらっていいですか？ あがったら、それとジャージを着てください」

「え、今日ですか？ 夜まで私だけです。だから、そんなに気兼ねしないでください。ね。というか、庇ってもらっておいて洗濯も着がえの用意もしないのは、さすがに……先輩だって、逆の立場だったらそうするでしょ？」

「あー……まあ、女性物の下着は確かにアレですけど……ともかく」

「ソコが脱衣所ですから、脱いだ制服はそのまま洗濯機の中に入れておいてください。シヤンブーは好きな使ってもらっているので、頭もしっかり洗ってくださいね？」

「先輩がシャワー浴びてる間に、いろいろ準備しておきますので。あがったら、リビングへ来てください。そのドアの先です」

「はい、じゃあそういうことで。さっさとお風呂入っちゃいましょうっ」

・トラック2

「あ、先輩でした？ コッチへどうぞー」

「ドライヤーの準備できてますよ。ここ、座ってください」

「うん……うん、ちゃんとキレイになりましたね。よかったあ。パンツは大丈夫でした？ サイズとか」

「……ふふっ、そんな恥ずかしがらなくても。先輩、可愛い」

「ちょっと気になるかもですけど、乾くまで待っててくださいね。それじゃ、さっそくドライヤー掛けちゃいましょうか」

//主：いや、自分でやるよ？

「ん？ いえいえ、私にまかせてください。というかやらせてください。ホントもう、申し訳ないので……助けると思ってます。ね？」

//主：まあ、そこまで言うなら……お願いしていい？

「ええ、もちろんです。燃やすつもりで乾かしますね」

「うそそう、嘘です。燃やさないです。そんな悲しい目で見ないでください」

「熱くないですかー？」

「はい」

「うん、こんなものかな。濡れてて気になるところありますか？ ……ん、よかった」

「次はコレですね。……………ん？　なにつて、保湿ですよ？」

「いやいや、先輩？　若いからって、保湿を甘く見てると痛い目を見ますからね？」

「確かにちょっと面倒ですけど、10年後に差がつくんですから。大人しくスキンケアされてください」

「……まあ、確かに今日1回やっただけじゃなにも変わらないと思いますけど」

「でも、保湿のやり方は知っておいてくださいね。男でも女でも、お肌が綺麗で困ることなんてなにもないんですから」

「はい、じゃあまずは化粧水です。目を閉じててくださいね」

「次は……うーん。クマもないし、レチノールはいいか。美容液にしますね」

「で、最後に乳液、と。コレ友達に教えてもらったんですけど、良い匂いなんですよね。お気に入りなんです」

「本当はこの後にクリームも塗るんですけど。先輩、結構お肌プルプルだからそんなしつかり保湿しなくてもいいかなあって」

「ホント、うらやましいくらい……目尻も綺麗だし。いいなあ」

「……い、いやいや。私なんてそんな別に。綺麗なんてことは……………や、やめまじよこの話。恥ずかしいんです」

「ふう、もう……顔、熱くなっちゃった」

「あっ、いけない。飲み物用意しますね。ちょっと待ってください」

「先輩、コーヒーでいいですか？ 飲みましたよね？ ……はい。んっと、お湯は…」

「ん？ あ、そうなんです。お父さんもお母さんも、コーヒー好きで。結構道具が揃ってるんですよーウチ」

「豆とミルもあるんですけど、私は結構コナ使っちゃってます。確かに挽き立てはおいしいんですけどねー……両親ほどこだわらないんで」

「あつ、せっかくだし豆から挽きましようか？ 電動なのでどっちでも面倒じゃないですよ。……ん、わかりました」

「ハイ、友達が来るとちよつと驚かれます」

「けど、これはこれで結構楽しいんですよ。面倒ですけど、なんかこう無心になれるというか。むしろ面倒だからこそ良いというか？」

「お父さんは、短時間のデジタルデトックスができて癒されるーとか言ってます。電動ミル使ってますけど。でも、私も普段からスマホばかり触ってるからちよつと気持ちはわかるんですよー」

「先輩も、よかったら試してみてください。良い絵の構図が浮かぶかもしれませんよ？ ……いや、先輩の実力の足下にも及んでいない私が言っても、説得力ないんですけど」

／主…そんなわけないって。五十嵐の絵は、俺より良いところがたくさんあるんだから

「ホントですか？ 先輩、私の絵のこと妙に褒めてくれますよね。ありがたいんですけど、自分じゃなにか良いかなんてわからないから、あんまり信じ切れなくて」

／主…でも俺だけじゃなくて、先生や××だつてよく五十嵐のこと褒めてるだろ？

「……まあ、確かに。それに先輩、あんまりお世辞とか言いませんもんね。それもわかってるんですけど……うーん。なら、信じてもいいんですかね……？」

「あの……今更なんですけど。やっぱり見てもらっていいですか？」

「いや、その……クロッキー帳。恥ずかしいは恥ずかしいんですけど、アドバイスもらえるならお願いしたいなあ、って」

//主…もちろん、俺で良いなら

「えへへ……やった、ありがと先輩。取ってきますね」

「お願いします。でも、厳しいこと言われるとへこんじゃうから、なるべく優しくしてくださいね？ ふふっ」

「……あ、お湯沸きましたね」

「それじゃコーヒー淹れるので、それ見ててください」

//主…そういうえば、熱湯はダメなんだっけ？

「あー、ですね。コーヒーの場合、熱湯はNGらしいです。90度くらいだったかな？逆に紅茶は熱湯が良いみたいですよ。あと、どちらもお湯を注ぐ高さでも風味が変わるとかなんとか、お父さんが言っていました」

「……いえ、私には違いはわかりません。お母さんもよくわかんないって言ってたから、私の舌はお母さんに似たのかもしれないです」

「と、そろそろいいかな……？」

//主……もしかして今、無心状態？

「あ、そう。コレです。無心でした今」

「お湯を一気に入れすぎないように、微妙な力加減で注がないといけなくて……これが結構難しいんですね」

「で、集中しちゃうから、気づいたら無心になってるんです」

「ふー……よし」

「お待たせしました。あ、お砂糖とかミルクいります？ ……おお、珍しいですね。ブラックですか」

「ウチに来る友達みんな、お砂糖もミルクも入れるので。ブラックで飲むの私だけなんですよねー」

「……いや、単にブラックが好きだけで、カッコイイもなにも無いですからね？ 好みの問題です」

「はい、どうぞ。ぜひ飲んでくださいっ」

「お、ホントですか？ えへへ、ありがとうございます」

「……ん、いい感じですね。よかったー、変なコーヒーをご馳走することにならなくて、やっぱり豆から挽いたのがよかったのかも？」

「もうちょっと、お父さんに教えてもらおうかなあ……」

「あ、あとこのクッキーも、よかったら食べてくださいね」

・トラック
3

(無言のループトラック。珈琲とクッキーでまったりするだけ)

・トラック 4

「はー……なんか、まったりしちゃいましたね。眠くなってますか?」

//主::うん。コーヒー飲んでるしね

「あ、たしかに。コーヒー飲んだばかりで眠いはずよね」

「けど、制服が乾くまでまだしばらくありますから。ソファで横になってください。私もよく、そこに寝っ転がってるんですよ」

「……あ。あんまり匂い、かがないでくださいね? 恥ずかしいですから。なんて、ふふ」

「おじやましてーす。……ん? どうしました、その顔。なにかついてます?」

「ああ、いえ。横になってもらうので、枕になりに来ました」

//主::なりに……? 誰が?

「誰がつて……膝? じゃなくて、太ももですかね。私の」

//主::ちよ、こ、これはさすがにダメだろ

「えー? そんな恥ずかしがらなくても……私の膝枕、イヤでした?」

//主::イヤとかじゃなくて……そ、そもそも、五十嵐だつて顔赤くしてるじゃないか

「……まあ、はい。私も恥ずかしいですが。……あーもう、いいから寝てください」

「う……ち、近い、かも。ううう……」

「だ、だから恥ずかしいことは恥ずかしいんです。けど、こうしないとできないじゃないですか。なのに先輩がイヤがるから……」

／主……ん？ できないって、なにが？

「え？ なにって、耳かきですけど。……あれ？ 言ってませんでした、私？ んん……??？」

「あー、まあ。なのでほら、いま言いました。理解できましたよね。ね？」

「……………うう」

「説明がなくてすみません。なんだか気持ち先走っちゃいました」

「それで、えっと……じゃあ、改めて」

「お風呂上がりですから、耳かきもしようかなあと思ってるんですけど。人にやってもらうの、イヤだったりしますか？」

「……ホントですか？ ああ、よかったあ……断られてたら私、部活の先輩を強引に膝枕しただけの女になるところでした。なんでしょうね、傍から聞いていると性癖にしては特殊過ぎますよね」

「妖怪に例えると、枕返しとか小豆洗に近い気がします。なんの話ですか？」

「……ハイ、すみません。ちょっとホッとしてテンション上がってました。片耳ずつやるので、向こうむいてもらっていいですか？」

「ありがとうございます。それじゃ、準備しますねー」

「触りますよー……………あれ、まだ少し湿ってますね。拭きます」

「ん、よし。しっかりドライヤー掛けたつもりでしたが、細かい所は全然でした。すみません」

「じゃ、綺麗になったことだし。さっそく綿棒入れていきますか」

「お風呂上がりは、綿棒やると良いって言いますよねー……………けど私、綿棒だけだといまいちスツキリできなくて。毎日やるのはよくないの知ってるのに、耳かきしちゃうんですねえ……………ん、こんなものかな」

「そうですね、綿棒はいつもサツとやって終わらせてます。耳垢を奥に押し込むだけだからあまりやらない方が良く、って話も聞きますし」

「……………まあ、ただ単に耳かきの方が好きだから、綿棒は適当にやっているだけとも言えるんですが。えへへ」

「人の耳をきれいにするの、久しぶりだなー……………あ、はい。たまにお母さんとか、お姉ちゃんの耳も綺麗にしてるんです。まあ、代わりに私の耳掃除してもらってますけど」

「結構評判いいんですよ。彩香の耳かきは丁寧で気持ちいい、って。なので期待しちゃってください」

「体重掛けないように気をつけますけど、なにかあったら遠慮なく言ってくださいね……………」

「手前から少しずつやっていくので、リラックスしててください」

「かゆかったりしませんか………？　ん、ならよかったです」

「ふう……先輩も、耳かき好きだったりします？　ずいぶん綺麗な気がするんですけど」

「……あれ？　そうなんですか？　うーん、じゃあ溜まりにくいタイプなのかもしれないですね。水分少なそうな耳垢ですし」

「あ、すみません。まじまじと見ちゃいました、恥ずかしいですよね」

「そういえば……耳垢が湿っている人って体臭も強い傾向にあるって話ありますけど。本当かもしれないですね」

「だって先輩……くん、くん。ほら、ぜんぜん匂いがしないですし。むしろ、なんか良い感じの匂いかも………？」

「あ……奥には少し、溜まつてるかな………？」

「あの、今更ですけど。私、臭かったりします？」

「……ホントですか？　ホントにホント？　優しい嘘はいらないですよ？　むしろ、正直な言葉こそが本当の優しさですからね？」

「……そうですか、ならいいんですけど」

「いや、だって……こんな密着してるのに、実は臭いと思われていたらもの凄いショックですし」

「……むう。なんか、私だけ意識しちゃって不公平だなあ。別にいいんですけど」

「次は、一番奥の方まで入れて行きますよ」

「危ないから、動かないでくださいね……」

「あ……やっぱりあった。んつと……」

「ふう………ハイ、取れました。カサカサしてるので、ちよつとつかまえづらかったですけど」

「とりあえず、コッチはこんなものですかね。綺麗になったと思います」

「はい、ですね。次は逆の……つて、ちよつと待ってください。仕上げがまだでした」

「まずはこうやって、ティッシュで拭いてから……」

「ふ……つ。ふつ、ふう……つ」

「ふふ、身体ビクッてしましたね。驚いちゃいました？」

「いえいえ、そんな。イタズラなんかじゃないです。耳かきとティッシュで取り切れなかった細かい汚れを吹き飛ばしただけですよ？」

「あんまり納得いつてないようですが、お姉ちゃん達にもやってますからね？」

「うんうん、信じてくれたならよかったです。はい、じゃあコッチ向いてください」

「チヨ口いなあ、先輩……」

「あ、いえいえ。ただの独り言です」

「けど、うーん……こっち向いてもらうの、恥ずかしいですね。自分のお腹の前に先輩の顔があるって、ちよつとありえない状況ですし」

「……改めて確認ですけど。さっき、臭くないって言ったのは本当なんですよ。あれが嘘だったら、いまとてつもない拷問に掛けられていることになりますからね、私」

「……え？ い、良い匂いですか？ それはそれで、なんか別の恥ずかしさがあるんですけど」

「うう……と、とりあえず、コッチもいったん拭きますねっ」

「ん、良い感じに水分も取れました。で、次は綿棒ですね……」

「はい、おーわり。ちょっとこなれ感出て来てません？ 私」

「うん？ こなれ感の使い方、合ってますかね。ていうか、ファッション用語じゃなかったっけ？ ん………？ まあいいか……」

「耳かき、入れますねー」

「さっきと同じく、手前からですよ……少しずついきますからね」

「えへへ、気持ちいいですか？ 人を癒す才能があるのかもしれませんが、私。個人的には、絵の才能が欲しいんですけどね……」

「あ……それで、あの。聞くの怖くて後回しにしてたんですけど。私のクロッキー、どうでした……?」

「ほら。耳かきしてる最中ならそんなに声出せないから、厳しいこと言われても怒られる感じが出なくて、そんなに凹まなくても済むかなあ……なんて」

／主…画力という意味では確かにまだまだ。けどオーソドックスな構図にとられないカメラ視点が多くて、その試行錯誤は強い武器だと思う。例えるなら、絵画よりはイラスト的と言えるのかな

「あー……はい、うん。そうかもです。自分でも、ちょっと美術っぽくはないかなあ……とは思ってました」

／主…それにたぶん、五十嵐は画力の低さが弱点だと思っているかもしれないけど、描いていけば後からついて来るものなんじゃないかな

「ですかねえ……先輩はどうでした？」

／主…俺の場合は、ただただ描き続けていただけだよ。キミや周りの人は上手いと言ってくれるけど、自分にとっては五十嵐の方がうらやましい

「私のことがうらやましいって、それ褒め言葉なんです？」

／主…もちろん。自分にはないセンスと強い熱量を感じるからね

「そ、そうですか……先輩にそう言われると、なんかちょっと照れますね。えへへ」

「けど、画力が低いのはやっぱり明確な弱さですし……うん。先生に言われたとおり、しばらくクロッキーがんばってみます」

／主…そうだね、特に手は顔と同じくらい表現が多彩な部分だから。ソコが上手くなれば、人物画でもそうじゃなくても明確なステップアップができるんじゃないかな

「はい、ありがとうございます。まずは余計なことを考えずに、とにかく続けないとですよね」

／主…それはそうなんだけど、楽しくないと続かないから。描きたい物を描く、ということも忘れないでね

「あ……はい、そうですね。楽しむことは忘れないようにします」

「ありがとうございます、なんだかスッキリできました。進むべき道がちょっとハッキリしたっていうか……見てもらってよかったです」

「それじゃ、先輩。一方的に感想を求めておいてアレなんですけど。また奥の方まで耳かき入れるので、ジッとしてもらっていいですか？」

「……はい、では」

「入っていきますねー……」

「ん、やっぱりコッチもそこまで汚れてないみたいです」

「ふう……はい、終わりです。さっきみたいに大きいのはなさそうですね。綺麗でした」

「あんまりカリカリやってたら傷つけちゃいますからね、ここまでにしめしよう」

「あとは」

「仕上げに……」

「ふー……っ。ふーっ、ふー……っ」

「はい、終わりです。お疲れ様でした」

「……ふふ、残念です？　じゃあ次からは、絵を見てもらって代わりにやってあげましょうか？」

「はい、私はぜんぜんいいですよ。いっぱい耳をふーっしてあげます」

「……あれ？　でも好きですよ、ふーってされるの」

「ふふふ、なんて。ちょっと意地悪しちゃいました」

「あ……膝枕、もういいんですか?」

「いえ、このまま私の膝枕で休んでもらおうかと思ってたんですけど。あんまりでした?」

//主::いや、むしろドキドキすぎて休むどころじゃなかった……

「え? あ……え、えっと……ドキドキ、したんですか? 私に?」

//主::すぐ目の前にいるくらい密着してて、ドキドキしないわけないだろう……五十嵐は違うのか?

「そ、そっか……いえ、あの。私もその、同じでしたけど。耳かきに集中してる内に、気にならなくなっちゃってました」

「でも、改めて言われたら、確かに近すぎましたよね……イヤじゃありませんでした?」

//主::全然。五十嵐は?

「わ、私は……えっと。なんていうか、その……チャンス、っていうか……」

//主::チャンス?

「あ、い、いえっ。なんでもないです、なんでも。ただ、その……私も、全然イヤじゃないです」

「それに、先輩……私のこと、仲の良い後輩くらいなのかなって思ってたんですけど。もしかして、結構その……意識、してくれてたりしますか?」

／主：え、っと……

「どう、ですか？ 先輩は、私――」

「あ……………お、終わったみたいですね、洗濯」

「えっと…………じゃ、じゃあ、取り込めますね」

・トラック5

「お待たせしました。これ、制服です」

「ちゃんと乾いたと思いますけど、まだ湿ってたらすみません」

「……あ、お父さんのとはいえ、先輩の穿いてたパンツは見てませんからね。私も、さすがにちよっと恥ずかしいですし」

「へ、変な反応しないでくださいよつ。さっきのこと、気にしてるんですか?」

//主::それは、まあ……五十嵐もじゃないか?

「あ……はい、気にしないって方がムリですよね……明らかに変な空気にしちゃったし。あはは……」

「あの、えっと……やめましょう、先輩。忘れて欲しいとは言いませんけど。ここからはいつも通りで。ね?」

//主::そう……だね。そうしよう

「……はい、では。風邪引かないでくださいね」

「あのっ!」

「えと、その……ううん、なんでもないです」

「また、学校で」